

R. B. ジョーンズ JR. 著

カレン語研究：記述・比較・テキスト

西 田 龍 雄

1854年に、Nathan Brown 師が *Comparative vocabulary of the Sgaw and Pwo Karen dialects* と題する一文を発表して以来⁽¹⁾、Robert Jones Jr. 氏のこの書物が出版されるまで、カレン諸語の研究は、かなり長い歴史をたどつて来た⁽²⁾。カレン諸語とは、いうまでもなく東南アジア西方地域（タイ・ビルマ）のやや広い領域にわたつて分布するカレン族の言語であり、一般にはシナ・チベット語族に属する一言語群であると考えられている。しかし、実際には、カレン語の系統は未だ証明されてはいない。⁽³⁾

カレン族を便宜上、地域的に大きくわけて、ビルマに居住するカレン族とタイ国に定住するカレン族に分類できるが、この2つの地域のカレン族の言語の間には、どの程度の差異があるのかについても、今までに、はつきりとわかつていない。勿論、ビルマのカレン語タイのカレン語について、これまでに短い報告が発表されて来た。しかし、それらの報告に見られる記述は、いずれも正確であるとは思えず、言語学の面ではあまり価値がないように見えた。たとえば E. J. Walton の *The Red karen vocabulary* (J. S. S. Vol. XVII part 2. 1923 pp. 80-99) は Red karen (karen ni) 語についての数少ない資料の一つではあるが、この資料から、Red karen 語（タイ国の）の体系はどのようになっているかは明瞭にはわからないし、その記録を他のカレン語と比べるための根拠とするにしても、比較する単位があきらかでない点に不安があつた。

どの言語に限らず一つの言語自体の記述を目標とした学問的な報告は、その言語の体系（音素体系、文法体系、語彙体系、などを）明らかにするとか、その体系を一つまたはそれ以上の他の言語体系と比較する（系統的に、または類型的な立場で）にあつて、素材となる単位を提供し得るものでなければ、我々は満足できない。現在話されている言葉に関してはとくにそうである。断片的であつたり、あいまいであつたりする記述はその言語の体系について大体の様相を提示するけれども、その

1) JAOS. No. 4. (pp. 317-326)

2) カレン語に関する文献については Robert Shafer, *Bibliography of Sino-Tibetan Languages* を見られたい。そのほか、たとえば T. THAN BYAH. *Karen school Reader* (pwo karen) Rangoon 1955; PO LIN TAY. *The Karen Readers III* (sgaw Karen) Rangoon 1956 などの教科書も数種刊行されている。

3) カレン語をタイ語系に入れる人もあり、また Bara 語などとシナ・チベット語族の中の独立した一派と見做す人もいる。中国の文献では、漢蔵語系に属させている。cf. Robert Shafer., *Classification of the Sino-Tibetan Languages*. Word. Vol. II. No. 1. 1955.

報告自体を、言語研究のための価値ある一つの資料として扱うことはできない。

R. Jones 氏の本書は、今まで発表されたカレン語に関する諸研究とは、この点で大いに相違していて、カレン諸語を一つの専門的な言語研究の対象として、我々に提供した。

まず、総括的にいつて、本書がカレン語研究の一時期を画する寄与である点を、筆者は高く評価したい。

筆者も、ビルマ滞在の折、カレン諸語のいくつかの方言について、短期間ながら調査し、インホームトから資料を集めることができ、カレン語の比較研究をもはじめていたが、現在の段階では、パオ語に関する資料のほかは、本書ほど材料がととのつてはいない。

Jones 氏のこの研究のお蔭で、我々はさらにこの報告から進んで、カレン語がどの言語類型に属するかもわかるし、比較言語学の対象として、ビルマ・ラシ・ロロ語、あるいはカチン語、モン語など、そのほかのビルマに分布する諸言語とどのような関連をもっているかをも検討することが可能になった。

未報告の言語あるいは報告が十分でなかつた言語については、たとえ小さい規模であつても、まとまつた体裁によつて、基礎的な資料を作ることが、困難ではあるが、必要な、そして重要な仕事であることは疑い得ない。Jones 氏の本書は、つぎに述べるようないくつかの検討を必要とする点を含んでいると考えられるが、筆者はまた、著者の着実な仕事に敬意を表わしたい。

さて、本書で扱われるカレン語は、専らビルマのカレン語に限定されている。その副題から明らかなごとく、本書は現代方言の記述研究とそれを材料とする比較研究、そして原初カレン語 (Proto-karen) の再構成を目標としている。第一部・第二部は、記述研究であり、第三部は比較研究ならびに原初カレン語の再構成にあてられる。第四部の各方言のテキストは、いわば記述研究の付録として扱うことができると思う。全体から見て、著者はこの中、比較研究により重点をおいているように見られる。

つぎに、記述研究ならびに比較研究と再構成の項目のもとに、著者 Jones 氏の意見を紹介し、その中のいくつかについて検討を加えたい。

著者はまずカレン語諸方言の中からスゴ・カレンのモールメイン方言をもつとも代表的なカレン語として取り上げ、その体系を、つぎの7つの項目のもとに記述する。(Part one: Description of Moulmein sgaw karen pp. 3-58)

- 1) 音韻論 (Phonology) 2) 単語類 (Word class) 3) 語形論 (Morphology)
- 4) 構文類型 (Construction types) 5) 名詞構文 (Noun constructions)
- 6) 動詞構文 (Verb constructions) 7) 文類型 (Sentence types)

つづいて第二部では、スゴ方言 (モールメイン・パセインの両方言)、ポー方言 (pho, モールメイン・パセインの両方言)、タウンドウ方言 (taungthu, 自称 pao)、パライチ方言 (palaychi) の六種について、音韻体系を極めて簡略に記述する。モールメインのスゴ・カレン方言については、第一部と部分的に重複しているが、この

第二部は各方言の音韻体系の記述というよりはむしろ、つぎの第三部において比較の対象になる個々の方言について、予め比較される体系と単位を提示した点に著者の意図があるのであろう。

著者 Jones 氏の音韻分析の方法およびその記述の仕方は、必ずしも明解とは云いがたい。とくに第二部で扱われた方言については、分析の手順の面はほとんど省略されている。しかし、その反面、著者の到達した結論が図表にまとめられているために、読者はそれらの図表を対照することによつて、各方言のこまかい特徴を、よく理解できる。

カレン語の一音節は 1 (2) 3 4 (5) の形であらわれ、1 はいわゆる初頭子音 (2) は初頭子音結合の第二要素、3 は母音、4 は声調、(5) は末尾子音をそれぞれ代表する。

1. スゴ・カレン語モールメイン方言 (MS) では、初頭子音は27種、バセイン方言 (BS) では23種ある。具体的に言えば、前者には c. ch. z. ɲ の4つが多い。そして MS 方言では [ɣ] と [h] は声調の型と相補的な分配を示すから、同一の音韻であると解釈でき、それが [h] と対立する。これを /ɣ/ : /h/ であらわす。しかし、BS 方言では、[ɣ] と [h] は対立する音韻であつて、それに対する [h] はあらわれない。この対立も、/ɣ/ : /h/ であらわす。しかし、筆者は、MS 方言の [ɣ] と [h] を一つの音韻 /ɣ/ の allophone として扱うことにはなお検討を要するよう思う。この両者がたとえば [ɣ] が低型声調に、[h] が中型および高型声調に、はつきりと分割されてあらわれるといった分配を示すのであれば、疑問は残らないが、実際には [ɣ] は低型声調のほか中型声調の中、母音に終る音節に、[h] は、高型声調のほか、中型声調の閉鎖音に終る音節にあらわれるという分配関係を示しているために、この両者の分配が果して完全に相補的であるか否かはなお調査しなければならぬと思う。
2. 子音結合の種類はカレン語にかなり多い。第二要素には、スゴ・カレン語では -w-, -l-, -ɣ-, -r-, -j- が認められる (ポー・カレンでは -w-, -l-, -r-, -j-, タウンドウでは -w-, -j-, -r-, -l-, -rw-, パライチでは -w-, -l-, -r-, -j-, -z-, -v- の相違がある)。しかしモールメインとバセインの両方言で、子音結合の種類がまったく同じではなく組み合わせが違つていて、MS では rw-, my-, sy- などがあるが、BS にはなく、MS にはない bw-, mw- が、BS に認められるなどの特徴がある。
3. 母音は MS, BS共に9種、i-e-ɛ, y-ə-a, u-o-ɔ (この張り合いはタウンドウ語のほか他のカレン方言とも同じである) 4. 声調 カレン語の基本的声調は六種であるが、母音に終る音節と閉鎖音に終る音節で一対を為しているから、三種の声調、高型、中型、低型にまとめることができる。MS と BS の声調を対照すると、

	高型	中型	低型
MS (モールメイン・スゴ)	/ ^ / [?]	— ~ ?	\ v \ [?]
BS (バセイン・スゴ)	/	— ~ ?	\ v \ [?]

の関係になつて、MS の /[?] 型が BS の / 型に合一していることがわかる。

著者は、ポー語の母音体系に, plain nuclei, nasalized nuclei, stopped nuclei の三種の対立を考えるが (たとえば e: en: e?, a: an: a?), このほかに、第三部および第四部でバセイン方言(BP)の表記に ɫn? を実際に用いている(例, /phɫn?/) これは鼻音化母音がさらに閉鎖音をとまうのかどうかはとくに説明されていない。(なお BP では声調は高型と低型の二種であつて、中型はない)。なお第一部には MS 方言の stress, juncture, intonation についての短かい記述がある。

第二部の最後には、パライチ方言の興味のある例があげられている (pp. 77-78)。

{ hý to cook (by stream)	{ cúzú to stretch
{ hỳq already cooked (by stream)	{ cùzú stretch (imp.)
{ péq to fight (with spears)	{ lèlò to wander
{ pèq fight (imp.)	{ lólò wander (interrog.) etc.

これらは、いずれも声調の相違によつて関連した意味の対立がなされている例である。Jones はこの中にはあきらかに、曾つての、おそらく母音交替をとまなつた声調変化 (tonal inflection), や子音変化の古いシステムの残存が含まれているという。これはたしかにチベット・ビルマ語系の特徴と共通していて興味のある事実と云える。しかし、そこに掲げられている例から、声調対立のタイプとそれらをもつ職能の対立を、全体的に整理することはむづかしいと思う。

言語記述の目的が、当該言語の構造を提示する点にあつて、単なる descriptive ではなく、prescriptive (predictive) であつてほしいことは云うまでもない。この点 Jones 氏の文法体系の分析はかなり成功していると思う。筆者は著者の分析を通じて、コズ・カレン語の文法体系をつぎのように理解した。

カレン語の一形態素は一単語にあたる。そして、単語の連続は、名詞構文と動詞構文が中心をなし、それぞれに (1) basic Construction (2) expanded Cs, (3) extended Cs. を考え得る。名詞構文には、このほか abbreviated Cs. があり、動詞構文には Negative Verb Cs. が認められる。

名詞構文の基本構文には 5 つの位置を設定できる。

1	2	3	4	5	
li?	γo	tə?	bé?	?i	
書物	赤い	1	→冊	この	《この一冊の赤い本》
	←	←		←	

この 1 の位置にあらわれ得る単語を Jones は primary Noun (N) と呼び、2 の単語を attributes (At), 3 の単語を quantifying specifiers (qS), 4 の単語を classifiers (cN), 5 の単語を demonstratives (dN) と名付ける。これらはいずれも単語類 Nouns に属する。このような 5 つの位置の構文に対して、γi? pha? d6? 家・大きい—《大きい家》は N と At. のみから、γi? ?i 家・この—《この家》は N と dN のみから、γi? pha? d6? ?i 家・大きい・この—《この大きい家》は N と At と dN のみから、それぞれ成りたつ。これらを省略構文 (abbreviated Cs) と呼ぶ。さらにつぎの構文

N	At	At	qS	cN	dN
kə? lɔ	θúθú	pha? dɔ?	tə?	bó	?i
蛇	黒い	大きい	1	→匹	この
←	←	←	←		←

《この一匹の大きい黒蛇》では《黒い》と《大きい》の二つの At が重出し、

N	qS	qS	qS	cN	
pya	tə?	shí	tə?	ya	《十一人の人》
人	1	10	1	人	

の例では qS が三つ重出する。この種の構文を、著者は拡張構文 (expanded Noun Cs) とよぶ。

これらに対して、二つ以上の At が含まれるときには配列の順序が変更される。

N	qS	cN	At	At	At	dN
kə?lɔ	lwi	bó	θúθú	pha? dɔ?	khé lə?	né?
蛇	四→	匹	黒い	大きい	すべて	それら
	←		←	←	←	←

大蛇すべて》

の例、あるいは、2つの Attributes が並列表示辞 (coordinating marker) (cM) をともなつて接合するときは拡張でよいが、さらに別の Attribute があるときには後置されて、拡大される。

N	At	cM	At	qS	cN	At
li?	?ékəli?	dɔ?	tádwa?	khi-bé?	lə?	
科目	→ 英語	→ と	→ 数学	→ 二	→ つ← 共	《英語と数学二つ共》

これを拡大構文 (extended Noun Cs) と呼ぶ。

動詞構文にも5つの位置を設定でき、著者はつぎのように名付けている。

mA | V | aV | aA | sV,

mA はムード動詞 (modal auxiliaries) で動詞に先行して mood をあらわす ; V は主動詞 (primary verbs); aV アスペクト付加詞 (aspectual auxiliaries); aA 形容動詞 (adjectival verbs) これは主動詞に対する限定辞; sV 副動詞 (secondary verbs) これは先行する構文に対する限定辞。この動詞構文の拡張構文は、副動詞のほかは、どの位置でも2つの単語を含み得、とくに定動詞 (V) の位置では最大限並列する4つの動詞を含み得る。

mA	V	V	V	V	aV	aV	aA
kə?	γé	ke	sɔ?	né			

でせう 来る 帰る 運ぶ 得る 《はこんで帰つて来得るでせう》

kə? pɔ? pha?dɔ? ma?

でせう 楽しい 大きく←非常に 《もつとも楽しいでせう》

mA の拡張: mA₂ mA₁ V

bá? lɛ 《行かねばならない》

kə? bá? lɛ? 《行かねばならないだろう》

kə? lɛ 《行くだろう》

否定動詞構文は、副動詞が含まれていれば、それが否定され、副動詞がなければ

形容動詞が否定される。この両者共がないときにのみ、主動詞が否定される。

mA V (mA) aV (mA) sV
le tə? θé 《行けない》
ʔó? tə? ʔá 《多くない》
tə? le 《行かない》

動詞構文の拡大構文は、形容動詞とムード動詞 および動詞補語にあらわれ得る。この第三の場合について述べよう。動詞補語は名詞または名詞構文であり、完全な主語・述語構文でもあり得るが、構文中主動詞のあとに挿入される。

mA V V Obj sV
ʔó? né ja lí
泣いた 私に もはや 《もはや私に泣きついた》
kə? télo ti na
よう→つげる 真実に あなたに 《あなたに真実に告げよう》

間接補語は前置関係辞 (relator) によつて導かれて、直接補語のあとにつけられる。

V Obj Ind. Obj
le có lá wətəʔkú?
行く 学校 の←ラングーン 《ラングーンの学校に行く》

Jones はスゴ・カレン語の単語類をすでに述べた Nouns, verbs, relators, adverbials (動詞形容), markers のほか interjections に大別し、さらに上記 Nouns について示したごとくいくつかの subclass に細分する。語形論では複合単語のタイプ四種, Verb compounds, Noun compounds, Adverbials compounds, pseudo compounds をあげ、その構成について述べる。この中から興味のある場合を二三あげよう。

Verb-verb compounds は /thɔʔ/up と /lɔ/down を 動詞につけて作られる。
/jɔʔ/carry→/jɔʔ thɔʔ/carry up: /té /say→/télo/ tell

Noun-Noun compounds の 属格複合は、/phó/ をともなつて、《……の人々》を意味する。/wè/ town→/wéphó/ citizen. /θəʔ wó/village→/θəʔ wó phó/villager. Pronoun-Verb compounds は 3 人称単数所有代名詞 /ʔəʔ/ を前接して、Verb から Noun を派生する。/wá/ white→/ʔəʔ wá/ whiteness.
/ye/ good→/ʔəʔ ye/ goodness

pseudo compounds は意味のわからない /pəʔ/ /θəʔ/ /kəʔ/ が Nouns, Verbs に複合して、新しい Nouns, Verbs を構成する。/dé/ cut off→/θəʔ dé/disappear, /dəʔ/ ride→/pəʔ dəʔ/ load (as a ship), /pàʔ/ pretend→/kəʔ pàʔ/ overlook. 以上に紹介した複合様式は、チベット・ビルマ語系の言語とよく並行している。

単純単語または複合語が、名詞構文、動詞構文を中心に連続するのであるが、その結びつき方に Jones 氏は三つの大きいタイプを区別する。(1) uncentered constructions, (2) centered constructions, (3) double centered constructions.

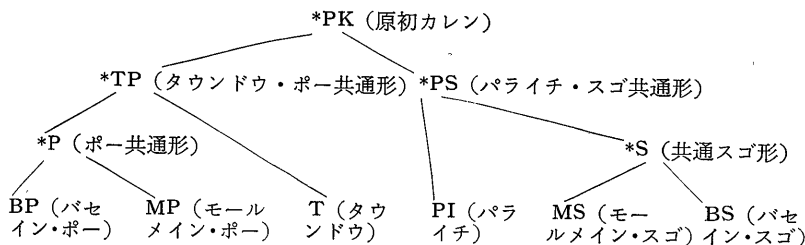
そして1)のタイプには主語・述語構文(predicative Cs.), 接合構文(connective Cs.)など(1)(2)(3)全体で19種の構文類型を明らかにする。

著者の文法記述は巧みに考えられた結果であつて、カレン語のみならず、近隣言語の記述にあたつても十分に参考になることと思う。またこの Jones 氏の記述によつてカレン語の文法体系が、今まで単にタイ語的であるとか、漢語に近いとか考えられていた意見を検討して、どの点がタイ語と一致しており、どの点が並行していないか、また、あらたにどの点でモン語と近いかを研究できるようになつた。これは是非試みてみなければならない。

比較研究と再構成

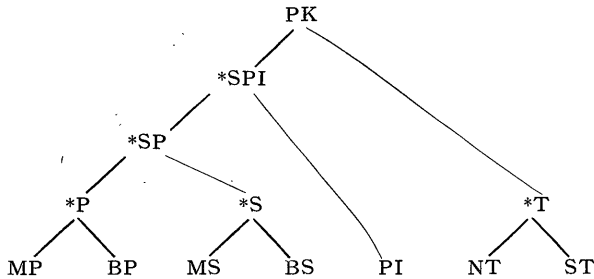
第三部、比較と再構成(comparison and reconstruction)(pp. 81-186)ではまず本書において採用された言語比較の方法について短かい解説がある。ここで用いた比較の方法は Linguistic bifurcation 説にしたがうと著者はいう。この説自体が未だいずれの論文においてもよく議論されていないから詳細な点はわからないけれども、概略つぎのような意見である。共通形式を再構成する目的をもつて言語を比較するときには、同時に多くの言語を対象とするよりは、幾組かの方言(または言語)の間でなされていくべきである。そして、どの組を比べたらよいかの決定は trial and error であつて、すべての可能な組が比べられて決定され、共通形式の再構成がなされるべきである。しかし、カレン語を対象とするときには、スゴ・カレンとポー・カレン二つの方言が他のいずれの方言よりもずつと近いことが十分に明らかであるから、どの組を選ぶかの手順は、この場合簡単になつたという。

本書で比較の対象となる言語(方言)は上に記したごとく、六種類がある(MS. BS. MP. BP. PI. T)この六種を一列に並べて比較するのではなく、この中からまず AB の言語を比べてその共通体系を設定し、つぎに AB の共通体系と C 言語を比較し、さらに ABC の共通体系と D 言語(あるいは DE の共通体系)を比べるという手順をとつている。本書はこの順序をつぎのように図式化する。



再構成の最後の段階を、ここでは原初カレンと名付けたが、これは六つのカレン語の親族関係の体系的な言明としてみ見做すべきであり、本当の原初カレン形に到達し得るまでには、そのほかの多くの方言も含まれねばならないという。そして、もつとも重要な方言として、赤カレン(Karenni または Kayah), Padaung, Paku, Leke (hill pho?), それにタイ国の多くのカレン語をあげる。

たしかに、MS と BS は互にもつとも近い関係にある。むしろ BS は MS に包含されるべき性格をもつていて、BS の形は原初カレン形を再構成する目的のためには無意義であるかの印象をあたえる。もし、この印象が真実として証明されるならば、MS と BS の共通体系 *S と PI. を比較するかわりに、MS, BS, PI を一列に比較しても同じ結果を招くにちがいない。事実著者の S 再構成形は、大部分が MS と一致しているから、*S の段階は必ずしも必要ではないと考えざるを得ない。著者の掲げる方言間の親近関係はなお再考する必要がある。著者は、おそらく鼻音化母音をもつかもたないかを大きい基準として、カレン語を二つのグループに分けたが対応関係自体を見るならば、スゴとパレイチを比較するよりは、スゴとポーと比べた方がより規則的な対応関係を発見でき、パレイチとタウンドウは、それらとは一応かけ離れた関係をもつているように考えられる。筆者の検討は未だ結論を得るにはいたっていないが、概略つぎのような関係をも設定し得るのみならず、この方がより妥当ではないかと思う。(筆者は北方タウンドウと南方タウンドウをたてる)



BS の形が MS と一致しない場合として、つぎの例がある。いわゆる接頭辞の対応関係の中には、つぎの3つの対応を発見できる。

1. MS θə?: BS θə?, 2. MS tə?: BS tə?, 3. MS θə?: BS tə?

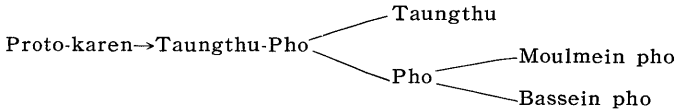
著者はスゴ共通形として、1) には *θə? を、2) には *tə? を設定、3) には何も仮定していない。これには推定形を保留したためであろう。

	MS	BS	*S
water leech	θə?li	təli	li
to peel off	θə?blu?	tə?blu?	blu?
large shallow bowl	θə? rə?	te? rə?:	rə? etc.

筆者は、この θə?:; tə? の対応関係を音韻対応として解決するべきではなく、‘to ache’ MS. tə?ki BS kə? ki (s *ki) の例も見出されるために、共同体における接頭辞 tə? θə? の交替に由来するものと想定したい。そして、上掲例は、それぞれ θə? li, θə? blu?, θə? rə? を基本形として推定する。筆者はスゴ・カレンの接頭辞には tə?, θə? < *sə?, kə?, pə? の四種を設定する。

第三部は、まえがきのあと、100, 200, 300, 400, 500 の項目に分けられる。100 Comparison of phonemic system では (pp. 85-90) 各方言および推定共通形の音韻体系の異同を図表にして対照し、200 Correspondences では 201 Tones

Final laryngeals and stops, 202 Initial consonants, 203 Consonant clusters, 204 Vowels にわたつて、同様に音韻対応を図示する。このような図表による表示はわかり易いが、各段階の共通形式も同列に並べられているために、推定形と実際の形の違いが一見してわからないきらいがある。300 Proto-karen では、原初カレン語の体系を図示し、それから近代諸語への変遷を概説する。たとえば上に掲げた系統図にしたがつて、



にいたる変化の過程を跡付ける (pp. 100-112). 400 Etymological glossary は、個々の単語形式の比較対照表であつて、401 PK High tone (語彙番号 1-110), 402 PK Low tone (111-195), 403 Incomplete and Irregular correspondences (196-859) の順に、全体で 859語を収録する。それにつづいて 500 English Glossary (pp. 172-186) は、上掲の Etymological Glossary の Index の役割を果しているとともに、上表に含まれていない孤立形式とか上表に掲げた形式の変形とか同義語などが記録されている。

つぎに、個々の単語形式の比較対照について、筆者が気付いた欠点を二三記しておきたい。

- 1). この比較表には、もつとも重要な基本単語と考えられる単語でも含まれていない場合がある。たとえば《眼》に関する単語《眼、眉毛、涙》などは除かれているし、《来る》、《行く》なども見出し得ない。
- 2). 各方言形の意味がよく記されていない。以下とくにタウンドウ方言について検討する。“face” mé² は、正しくは《眼》の意であろう。《顔》は筆者の記録では /mɛŋaa/ である。⁽⁴⁾ (cf. ビルマ語《顔》mye na すなわち目と鼻)。“arm” と “hand” は共に同一形式 cù をもつて表記されているが、筆者の記録では “arm” は cù bɔn, “hand” は cù である。同様に、“foot” と “leg” もこの書では共に kháy であるが、筆者の記録では “leg” は khan [k'ã], “foot” は khan ya である。“jaw” ká は筆者の記録では “chin” であり、“jaw” は ka-po である。
- 3). 形態素の表記に、前後不統一なところがある：“to sit” ʔɔŋ láŋ のはじめの形態素と “to live” の ʔɔŋ は同じ形態素であると考えられるが、Jones 氏は異つた声調を与えている。“to sleep” béŋ thā と、“to dream” biŋmāŋ のはじめの形態素は共に同一であると考え得るが、Jones 氏は異つた2つの形式で表記する。(筆者 /bein/)

4) 筆者のタウンドウ方言すなわちパオ語 (Pa-o) は、Pa'an 方言にもとづいている。Pa'an はモールメインの北方 33 マイル、タトンの東方 24 マイルの地点である。インホームントは Mr. Soe Tint. (モールメイン・カレッジの学生)。ここでは便宜上、この方言を南方タウンドウ (南方パオ方言) と呼びたい。これに対してここで北方タウンドウと称したのは、タウンヂの方言を指している。

4). 2つの違った意味に同じ一つの形式を比接している。(212) “close (the eyes)” と (272) “to sleep” に béŋthâ をおく。これは《ねむる》の意味であつて、《閉じる(眼)》の意味ではない。(699) “to blow gently (breeze)” と (120) “the wind” に、共に t̃ə'li を記入するが、これは単に《風》の意味であつて《吹く》の意味はない。

5). あきらかにビルマからの借用語と考え得る形が記入されている。“to lick” と “to taste” に同じく l̃ják を記入するが、これはビルマ語であろう。筆者の記録では “to lick” は /ʔa-mɔ/, to taste は /ʔwi/ である。“low land paddy field” l̃ai もビルマ語からの借用語であろう。筆者の記録では /lain/ である。

カレン諸語の比較研究には Jones 氏のこの書物が公になるまでに、André G. Haudricourt の二つの論文とそれにつづく G. H. Luce 教授の寄与があつた。A. Haudricourt, *Restitution du karen commun* BSL. XLII pp. 103-111 1946; A propos de la restitution du karen commun BSL. XLIX 1953; G.H. Luce, *Introduction to the comparative study of karen languages* JBRS 1959. pp. 1-18

Haudricourt は、はじめの論文で W. C. B Purser の *A comparative dictionary of the Pwo-karen*. Rangoon 1922 をもとにして、スゴ・カレン方言とポー・カレン方言を比較し、共通カレンの再構成を試みた。Haudricourt のこの研究は、たとえばさきに掲げた Brown 師の論文に比べてずつと進歩し、いくつかの新しい結果を導いた。しかし、資料が全く Purser の字典を利用することに限られ、云わば記録されたカレン文字をローマ字に置き換えた形式の比較であつて、文字転写の立場自体にも問題があつた。

Haudricourt の発見と主張はつぎの諸点にある。

1) 南方方言(ポー・カレン)の出気音 k', c', t', p' ではじまる単語の大部分は、北方方言(スゴ・カレン)の無気音 k, c, t, p をもつ単語に対応する。この対応関係をもつ単語には、共通カレン語 (le karen commun) として、一連の有声閉鎖音 g, j, d, b を推定する。これはタイ諸語の場合と極めて類似している。

2) そして、これらの単語はいずれも低型トーンをとるから、カレン語においても、タイ諸語と同様に、初頭音の変化と声調の変化を互に関連して考えることができる。二方言の声調の規則的な対応によつて、共通カレン語の声調と初頭音の性格を同時に推定できる。共通カレン語の声調は三種(高型・中型・低型)であり、初頭音の性格はつぎの規則で決定できる。A. 高型トーンをもつ単語には、共通カレン語無声出気音を推定する。B. 低型トーンをもつ単語には、共通カレン語有声無気音を推定する。ただし、ñ, n, m, l, r, w の中には、低型トーンをもたないで、高型トーンをもつ単語がある。それらには、'ñ 'n etc を推定する。

A の系列の子音 k', c', t', p', 'ñ, 'ñ-(y-), 'n, 'm, 'l, 'r, 'w, s, k'r, p'r, x-
B の系列の子音 g, j, d, b, ñ, ñ-(y-), n, m, l, r, w, gr, br, y-

3) 上記の高型の子音と低型の子音のほか、中型の子音のクラスがあつた。このク

ラスの子音には、つぎの共通カレン語形を推定する。

ポー・カレン d- b- t- p-
 スゴ・カレン d- b- t- p-
 共通カレン t- p- tt- pp-

4) 現代二方言の間の対応関係が複雑であるから、共通カレン語の末尾音(韻)も特異であつて、-n, -m をもつとともにおそらく母音の長短の相違もあつたのではないか。しかし、それについては再構成する方法をもたない。Haudricourt は 27 の対応関係を設定して、35種の形を推定した。(-n は -ñ, -n, -m の代表, -t は -k, -t, -p の代表)

i	in	it	in	: u	un	ut	: û	ûn
e	en			: ü	ün	üt	: ù	ùn
ê	ên	êt		: ö	ön	öt	: un	
o	on	ot	ôn	: œ		œt		
a	an	at	ân	: ai	au			

5) カレン語における初頭音の発展は、タイ諸語と並行し、末尾音(韻)の発展はビルマ語と同じタイプであつたにちがいない。

この Haudricourt 氏の有声音系列の設定と高型トーンをとる鼻音の系列 'n, 'm, 'l, 'w- の推定は、ビルマ学の権威 G. H. Luce によつて、強い支持が与えられた。H 氏のこの推定は、タイ諸語の場合からのまつたくの類推のもとになされたことは推測に難くないが、Luce は Bwè 方言では有声初頭音を今なお多く保存し、Päku 方言も Bwè よりはすくないがやはり有声初頭音を保存している点から、そして Bwè の方言では、高型トーンの n- m- に対して、breathed sonant initials を多く保存している点から、⁽⁵⁾ H 氏の結論の正しさは十分に証明されるとして、この考えに強い支持を与えた。カレン諸語の比較研究にあつて、これらの基本的な推定はすでに一般に承認されてよいと思つていた。ところが、この Jones 氏の比較研究の結果では、この2点は、まつたく無視されている。

初頭子音について Jones 氏の原初カレン語形を Haudricourt 氏の共通カレン語形に対照するとつぎのようになる。

	中型	高型	低型	中型	高型	低型	中型	中型	高型	低型	中型
Haudricourt	k-	k'-	g-	p-	p'-	b-	pp-	t-	t'-	d-	tt-
Jones	k-	kh-	kh-	p-	ph-	ph-	b-		th-	th-	d-
Haudricourt	c-	ch-	j-		x-	ɣ-			s-	'-	
Jones	c-	ch-	ch-		x-	-			s-	ʔ-	

5) Luce はつぎのように書いている。I give the Géba forms in my Table. But my informant admitted that Gé-ba-speakers are getting shaky. When I asked her whether "to sleep" was s'ɔ² mi¹, or s'ɔ² 'mi¹ she said "My mother says.....'mi¹, but we children say..... mi¹" (JBRS 1959. p. 8)

	低型	高型	低型	高型	低型	高型	低型	高型	低型	高型
Haudricourt	n·	'ñ·	n·	'n·	m·	'm·	w·	'w·	ñ·(y·)	'ñ('y·)
	r·	'r·								
Jones	ŋ·	ɣ·	n·	n·	m·	m·	w·	w·	j·	j·
	r·	r·								

筆者は, tt, pp· の形を ?d·, ?b· または ?d· ?b· (D. B)によつて表記する)に改めて, Haudricourt の再構成形の方に賛同したい。そして 'ñ· 'n· などは hɣ· hn· などで表記したい。

Jones 氏が再構成する原初カレン語形式にはさらに検討すべきところが少ない。たとえば Jones 氏が PK* phr· を推定する単語に《舌》《買う》があり, *phl· を推定する単語の一つに《縄》がある。これらの単語はつぎの対応を示している。

	T	MP	BP	PI	MS	BS	PK
tongue	phre	phle	phlé	plé	ple	ple	*phré'
to buy	phre	xwe	xwé	?ɔ̃qpwí	pɣe	pɣe	*phrwèi'
rope	tɔ̃?phrwi	phli	phlý	plé	pli	pli	*phlwèi'

この例から見ると,むしろ“tongue”と“rope”に *phl· を“to buy”に *phr· を推定した方が自然であると思う。参考のために筆者が記録したタウンドウ方言形と筆者の推定する共通カレン形をつぎに掲げる。

	《舌》	《買う》	《縄》
北方方言	phrei	phrei	ta' phrwi
南方方言	plei	plei	ta' plwi
共通カレン語	*ble LI	*bre LI	*ta' blwi LI

この種の子音結合の再構成にはとくに, なお議論の余地が残されている。たとえば, つぎの諸例に与えられた共通形式は, どうしても納得できない。

	T	MP	BP	PI	MS	BS	PK
star	chá	śá?	śà	sháq	shá?	shà	*chláq
to plan	kjám	kón?	kòn	kùq	kú?	kù	*kjaumq
tail	mê	mé	mé?	mà	mé	mé	*mjé?
sour	chjá	shén?	shèn	shóq	shí?	shi	*chjáinq

[なお, 筆者の資料では, タウンドー(南方方言)《酸い》šaa 《尻尾》tá'mèi 《星》cha である]

この問題は, 各方言に認められる特有の子音結合がそのほかの方言のどの結合と対応するかを発見することである。しかし, この問題はほとんどの場合解決されていない。さらに, この問題をめぐつて, Jones の著書には, 別の重要な事柄が示されていることに気付いた。たとえば, スゴ・カレンのモールメイン方言で特有の子音結合, たとえば my· thr· があつて, 第一部の記述研究のところでは myá, “spade” θə?thry? “quiver, shake” の例があげられていた。誰もこの my·, thr· がほかの方言で如何なる対応形をもつかを検べてみたいと思う。幸に比較単語表に, この意味

の単語が収録されている。しかし、我々の予想を裏切つて、比較表には、MS. *myá*, *θəʔthryʔ* の形が記入されていないで、MS のところに他の方言形と共通する “spade” *təʔ pùʔ*, “quiver, shake” *waʔ* があげられている。*my· thr·* の子音結合にあたる他の方言形式はなおわからない。これは何を意味するのであろうか。同種の例をなおいくつか発見できる。

	borrow	village	market
第一部に記された形式	<i>ɲá</i>	<i>rwáʔ, θəʔwó</i>	<i>zé, phjá</i>
比較表に挙げられた形式	<i>lò</i>	<i>θəʔ wó</i>	<i>phjá</i>

[Blackwell の *The anglo-karen dictionary* (スゴ・カレン) には *myá*,

rwáʔ, zé の形式は登録されていない] これは著者の誤りとは考え得ないから、スゴ・カレンのモールメイン方言には、同義語がかなり並存していて、普通にはカレン語本来の単語よりも、ビルマ語からの借用語 *ɲá, rwáʔ, zé* の方がより多く使用されることを意味するのであろう。これは十分予想できる状態である。

カレン族は過去および現在において、ビルマ族のみならず、モン族とも非常に多くの接触をもつた。これら三者の相互影響は、言語の面においても見逃すことのできない程大きいものであつたと考えられる。この三者に、さらにカチン族を加えて、それらの間の関連を追求することは、ビルマにおける氏族の層、言語の層を考察する上に、欠くことの出来ない論拠となるであろう。私々は当然、Jones 氏のこの資料を利用して、カレン語の系統論に進むべきであり、Jones 氏の研究は全般的に見て、開拓者の仕事としての欠点を多く含んではいるが、今後カレン語の比較研究、あるいは系統論の出発点になることは疑い得ない。これらの基礎的資料が整備されて、次第にチベット・ビルマ語派に所属すると予測できる各語系の諸言語の相互関係が明瞭になつていくのは大へん喜ばしいことである。

本書第四部 *Four text* (pp. 189-283) には、1. *Moulmein sgaw text*. 2. *Palaychi text*. 3. *Bassein Pho text* が記載され、ことにモールメイン・スゴテキストの *Folk History, Tawmepa (Pig's-tusk-father)* の物語は極めて興味深い。

(Robert B. Jones, Jr.; *Karen Linguistic Studies: Description, Comparison and Texts*. University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1961.)